

テレビ会議システムを利用した 日本とニュージーランド間の国際遠隔授業

苫小牧工業高等専門学校准教授 小野 真嗣

海外で仕事ができる技術者養成を目指して

高専生の英語力と言えば、一昔前までは「極めて弱い」というイメージが付いておりましたが、それは当時の技術者には英語力が今ほど重要視されてはいない時代であったことも一つの要因かと推察します。

しかし、国立高専は平成三年以降、設立当初からの本科五年(商船は五年六カ月)の課程に加えて専攻科二年の課程が増設され、教授内容の高度化が図られたことを皮切に、平成十六年の独立行政法人化、また同時期に日本技術者教育認定機構(略称、JABEE)や機関別認証評価等による外部評価の導入、さらに日本のグローバル時代突入による技術者の国際的な活躍等々の情勢から、海外でも仕事ができる技術者養成が一段と求められるようになり、英語の習得がコミュニケーション力獲得という点で一躍クローズアップされるようになりました。

筆者は勤務七年目になりますが、前述した流れもあって、平成十五年度からコミュニケーション指導強化の下、英語担当教員枠の一名

増員に伴って赴任し、近年は業務内容として海外で仕事ができる技術者養成のための英語指導に組織的な取り組みとして従事することとなり、とりわけ国際遠隔授業に携わることとなりました。

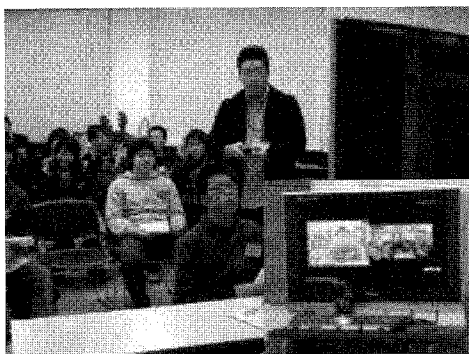
高専における教育の国際化の一例

各高専は大学・短大と同様に教育の国際化に鋭意取り組んでいるところです。苫小牧高専の取り組み事例を申し上げますと、学生の国際性涵養のために一般教養・語学系科目の充実を意図して科目が配置されており、特に専攻科において「異文化コミュニケーション」の科目(筆者担当)を展開させているのは、他高専には無い特筆すべき点であると思います。また、実用英検やTOEIC等の資格試験の受験を積極的に奨励し、修得レベルに応じて単位認定を行う制度や専攻科入試への出願条件にも適用させるシステムを導入したことで、学生への国際性に関わる学修の動機付けは従来以上の成果を挙げつつあるものと考えております。

しかしながら、学内の環境をはじめ現在の

日本において、学生が外国人と直接触れ合え外国語を用いる機会には非常に限定的であり、日常的に異文化に触れる機会を学生に提供することは非常に難しいのが現状です。

このような学習環境を改善するべく、苫小牧高専では他高専と比べると後発ではあるものの、平成十七年度より第一回の学生語学研修派遣を実施、翌十八年度には苫小牧市との姉妹都市提携の縁によりニュージーランドのネイピア市にある Eastern Institute of Technology (略称、EIT)との学術交流協定の締結と、



国際遠隔授業の様子

着実に環境整備を進めてきました。本稿で後述する国際遠隔授業は、学生派遣という形の国際交流事業を発展的に拡大させ、平常授業の一部にも国

際交流体験を組み込めるよう整備を進めた末に実現できたプログラムです。これには平成十九年度の文部科学省競争的資金「大学教育の国際化推進プログラム」への応募が採択されたことが大きな潮流となり、教育機材の整備が急速に進んだ結果、導入されたテレビ会議システムを通して苦小牧高専とEITの教室がつながり、平時の授業の中で海外にいる外国人と直接リアルタイムで触れ合える機会を学生に提供することができるようになったことが学生の国際性涵養の実現に向けた大きな第一歩となりました。

国際遠隔授業の実施に際して

この国際遠隔授業は、大学三年生に相当する高専専攻科一年生約二五人を対象に平成十九年度以降継続的に行われ、年四〜六回程度実施されています。通信先となるEIT側は学内にあるJapan Societyという日本語・日本文化への興味を有する団体のメンバーであり、メール等で準備を進めながら快く対応して頂くことができました。国際遠隔授業を行う上でネックになる部分が時差と回線速度の問題ですが、ニュージールランドとは時差四時間(夏時間)と短く、授業時間に多少の配慮は生じるものの、時間に関しては十分に対応可能でした。しかし、回線についてはニュージールランドは日本に比べ細く、結果的に専用の高価な機材が必要となったことが実現に至るまでに苦労した点でしょう。

遠隔授業に先立った形で次のような事前指導も行いました。学生個々にEITメンバーのパートナーを割り振り、苦小牧高専とEIT間でメール交換を行う課題を設けました。このメール交換を行った意義としては、文字

によるコミュニケーションを通して、普段英会話を苦手としている高専生でも、英文作成に時間をかけながらも、自分自身で相手と意思疎通を図ることが可能であるという意識を持たせた点です。

また、テレビ会議システムを用いた対面による即時性のコミュニケーション活動に移行する前に、教員が学生に英語を使う訓練機会を十分に与え、遠隔授業のためのウォーミングアップ的活動としても位置付けております。特に、平成十九年度の初年度は学生はおろか教室現場で遠隔授業を担当する筆者でさえ相手方との面識が無い状態から実施せざるを得ない状況でした。しかし、その不利な状況と考える状態を逆に利用し、Information Gapを活用することで、相手の顔などの特徴を知りたいという欲求を駆り立て、英語学習の動機付けを行いつつ、遠隔授業当日までに期待感や高揚感を持たせる方向をとったことが、事前指導としての成功を収めることにつながりました。

様々なコミュニケーション手段を駆使して外国人と意思疎通を図る高専生

遠隔授業で取り扱ったテーマはここ二年間では次のようなものとなりました。①自己紹介②学校紹介③実演を含んだ両国料理説明④漢字の成立及び地理的相違・類似性(両国文化紹介Ⅰ)⑤クリスマスなどの過ごし方の違い(両国文化紹介Ⅱ)⑥家電製品への不満や不便さに対する改善策の提示(技術支援)、と多岐に渡りますが、最初は一般的かつ平易で身近な内容をテーマにすることで、双方に扱いやすい内容としましたが、回数を重ねるたびに徐々に難易度を上げ実践性を持たせ、二

年目には技術者の卵である高専生として、技術支援的内容にも踏み込んで実施できました。

この遠隔授業で最も重視した点は、作り方の実演を交えた説明や家電製品への不満を聴取してそれに対応する等々の活動に代表される実践ベースでコミュニケーションを展開することに配慮した点です。当初は英語での会話に不安があったりうまく対応できなかったりという状況が見られたものの、外国語を実際に使って自分の意図を伝える、あるいは相手からの情報を集めるという経験を積み重ねていくことによって、アイコンタクトやジュスチャー等の言葉以外のコミュニケーション手段も体験的に必要性を理解し効果的に駆使しながら、コミュニケーションに対する積極的な態度を身に付けるという姿は十分に観察できました。また、テレビ会議を通しての会話ではあるものの、メール等では味わえない相手が見える形での英語を使ったコミュニケーション活動の実践によって、大いに異文化に慣れ親しみ興味・関心を高める機会ともなりました。

学生のさらなる飛躍に向けて

筆者自身、国際遠隔授業は学生時代からの研究上の専門分野ではなく、実施に際しては素人同然で緊張の連続でした。文句を言わずに本取り組みについて来てくれた学生たちには大変感謝しておりますし、それをサポートして頂いた関係各位には深く御礼申し上げます。今後も学生のさらなる飛躍を応援するべく、必要な指導ができるよう精進して参りたいと考えております。本稿をお読み頂いている皆様からのご意見等頂けましたら幸いに存じます。